

# ICTを活用した 情報発信スキル培う

「国際連携アクティブラーニング」。その大きな特色は、海外のパートナー校の生徒たちと一緒に、国際大会に向けてプレゼンテーションの内容を練り上げて発表するという点だ。活動を行うに当たり、両国の生徒たちを交え、チームを編成。夏休みは海外から日本、冬休みは日本から海外へと、直接対面で発表内容を吟味してから大会に臨む。こうした国際交流に関して、「まず生徒同士が仲良くなり、それから本音で伝えたいことの議論を重ねることが大切」と語る研究担当の池田明主務教諭。「これまでの障壁を突破し、折り合いを付け、一つの発表を練り上げていくことが大きな醍醐味になる」と話す。

## 大阪市立東高校

ワールドユースミーティング（WYM）とアジア学生交流プログラム（ASEP）。二つの国際交流プログラムを柱に、大阪市立東高校（森知史校長、生徒951人）では、海外の高校生との交流を通じて「国際連携アクティブラーニング」に取り組んでいる。ICTを活用した主体的な情報発信スキルを身に付けることがねらい。影戸誠・日本福祉大学客員教授の指導・助言を受け、現在は（公財）パナソニック教育財団の特別研究指定校として学びの充実を図っている。その取り組みの内容とは一。



ネットを使って意見交流を重ねる生徒たち

## 海外の高校生たちと

## 大会発表の内容練る

「国際連携アクティブラーニング」。その大きな特色は、海外のパートナー校の生徒たちと一緒に、国際大会に向けてプレゼンテーションの内容を練り上げて発表するという点だ。活動を行うに当たり、両国の生徒たちを交え、チームを編成。夏休みは海外から日本、冬休みは日本から海外へと、直接対面で発表内容を吟味してから大会に臨む。こうした国際交流に関して、「まず生徒同士が仲良くなり、それから本音で伝えたいことの議論を重ねることが大切」と語る研究担当の池田明主務教諭。「これまでの障壁を突破し、折り合いを付け、一つの発表を練り上げていくことが大きな醍醐味になる」と話す。

た感覚を身に付けた生徒は、文面だけでなく実際に自分の肌で実感しなければ納得しなくなるという。この取り組みを経験してからステップアップを図る。海外で活躍したり、外とつながりのある仕事・職業を選択したりする卒業生もいる。「今スペインで勉強しています」などの連絡メールが届くと、池田主務教諭は「生徒の成長がやりがいにつながり、大きな手応えを感じる」と話す。他学科にも広がる。前任教でも、国際交流プ

本格的に軌道に乗り出したのが数年後だった。それは、文科省からスーパーサイエンスハイスクール（SSH）の指定を受けていた時になる。「理数科」の課題研究として、情報科では英語科と連携し、ICTを使った国際交流に取り組んでいた。その実践が評価され、2017年度から「英語科」や「普通科」にも広がった。取り組みは9年目。各教科とも連携を図り、池田主務教諭が中心となって進めている。同校では情報科が2単位必修になっている。そのため、3年間のうち、どこかの学年で必ず毎週2時間の授業がある。そこで参加の募集を掛け、本年度は12人（3学科4人ずつ）の生徒が集まり、相手国の3人の生徒を加えて15人1グループで活動している。

「コロナ禍の中で、毎年、大会のテーマは異なる。例えば、社会状況や徒弟の意見を踏まえて「教育は時代を乗り越えよう」という切り口で話し合いを重ねた。年度当初、日本の学校は新型コロナウイルスで臨時休業があった。一方で、交流相手校から「4. 質の高い教育をみんなに」が選ばれた。今のある台湾は、世界で最も感染拡大の封じ込めに成功したといわれている。さまざまな意見が出て議論が平行線をたどる中、折り合いを付け、テレビ会議を通して発表台本とプレゼンのスライド資料を作成したという。

本年度はコロナ禍を受け、思うような活動ができない状況にある。事態が落ち着くまで、現地での交流はできないような状態だ。「大会がオンライン開催になっても、取り組みの核となる部分は変わらない」と話す池田主務教諭。大会に向けてのプレゼン準備もオンラインで進められた。活動に対する両校の温度差を縮め、話し合いの充実を図ることが今後の課題になる。

影戸 誠 日本福祉大学客員教授



取り組んだ国際連携イベントで中心的役割を担った。連携しつつも実験校としての、自校のICT活用方に当然差はあるが、本校のコーディネー

多数の学校、海外38校、国内20校には、英語コミュニケーション力、IC

た協働学習の「要点を指導に悩む高校に提供することである。また、本校は、世界での整備が進みつつあるIC

## 英語プレゼンを指導できる力

IT力を、国際連携力を基礎に育成し、その成果をまとめた。英語プレゼンテーションの進め方を、他校に実践

トで学校間の指導法を共有し、発展させている。英語プレゼンテーションの進め方を、他校に実践

ITに着目している。国際的感性を得る手段に熟知し、交流するノウハウが蓄積されている。ともに校に提供できるだろう。